

十文字学園女子大学人間生活学部紀要第4巻 2006年

## 現在における幼児の育ちの傾向 (2) — 保育者による発達評価の縦断的調査結果 —

A Study on Developmental Changes of the Contemporary  
Preschoolers : Results of Teachers' Longitudinally Evaluation  
of Child Development.

長田 瑞恵  
Mizue NAGATA

野口 隆子  
Takako NOGUCHI

関口はつ江  
Hatsue SEKIGUCHI

### 要 約

本研究は、幼稚園児を対象に同一年度内に約9ヶ月の間隔をあけて発達評価調査を2度実施し、現在の幼児の発達の縦断的变化を検討した。その結果、以下の点が明らかとなった。(1)全体的には年度の初めよりも年度末の方が発達は進み、この傾向は特に年少児と第1回の達成率が低い子どもに顕著であった。(2)領域によって発達の達成率に違いがあり、2時点間の達成率の伸びにも違いがあった。(3)各年齢における発達の達成率のばらつきは年度の初めの方は大きい年度末には差が縮まった。(4)年齢や年度当初の達成率の違いによって2時点間の達成率の伸びに違いがあった。

### 英文要約

This study longitudinally examined developmental changes of the contemporary preschoolers. A questionnaire for assessment of child development was administered on the same children as subjects, twice in the same school year. The results was following: (1) Generally children's developmental achievement rates gained through the school year, and this tendency was more salient in younger children and in the slower children at the first inquiry. (2) Achievement rates and these increase between two inquiries differed according to the areas of development. (3) Dispersion of achievement rates of each grade was greater

---

十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科

Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：小学校適応 発達評価 生活調査 縦断的検討

at the first inquiry than the second inquiry, and it decreased at the second inquiry. (4)The increase of achievement rates between two inquiries differed according to children's grade and the state of their development at the first inquiry.

## はじめに

現在、幼児の生活環境の変化による発達の問題が指摘され (e.g.,仙田,2005), 保育現場でも適切な対応が求められるところである。筆者らは今の幼児の発達状態の把握のために、1969年保育学会実施の発達調査と幼稚園児を対象とした2003年調査との発達評価の比較を行った(関口, 2003)。その結果、現代の子どもは35年前と比べると3歳児においてかなりの発達の遅れがみられるが、5歳児においてかなり回復しており、幼稚園教育の影響力が大きいことが示唆された。また、関口・長田・野口(2005)では、各幼稚園における一人一人の幼児の育ちの過程をより的確に捉えるために、評価項目を修正して、園の保育方法タイプ差の測定をさらに厳密に行うとともに、発達評価項目を現在の幼稚園教育要領のねらいに即する内容を含む6分野にして、保育方法タイプ別に評価の仕方を測定した。その結果、全体的には前回同様一斉活動時間の長い園において評価が高い傾向が明らかになった。さらに園タイプによる評価差は3歳児期においては認められたが、5歳児期になると殆ど差は認められず、8割以上の到達状態であることを示した。

しかしこれまでの研究は横断的検討であり、一人の子どもの連続的な発達過程や発達の速度というような縦断的実態は明らかにされない。そこで、本研究では、一人一人の幼児の育ちの過程をより連続的に詳細に捉えるために、同一調査対象者に対して同一年度内に約9ヶ月の間隔をあけて発達評価調査を2度実施した。また、第1回調査における発達の程度に応じてその後の9ヶ月に渡る発達の様相に違いがあるかを検討した。これによって、現在の幼児の発達の縦断的变化を把握すると共に、ある時点での発達の程度によってその後の発達に違いがあるか否かを明らかにすることを目的とした。

## 方 法

**調査方法** 調査項目は関口・長田・野口(2005)において使用した項目計128項目(知的領域25項目, 運動的領域20項目, 情緒的領域25項目, 社会的領域25項目, 生活習慣17項目, 遊び16項目であった。資料に質問項目を示す。マークシートを用い、担任保育者にそれぞれの項目について「出来る・よくする」から「できない・しない」の5段階尺度で記入して頂いた。

**調査対象** 関東, 東北, 北海道の9私立幼稚園園児1464名, 評価保育者78名であった。園児を第1回調査の6領域全体の達成率に応じて学年毎に3群に分けた(以後「達成率群」と呼ぶ)。上位群, 中位群, 下位群とは、各学年で第1回調査時にそれぞれ上位3分の1, 中位3分の1,

下位3分の1に入った子どもたちであった。人数の内訳を表1に示す。また、それぞれの達成率群における達成率の平均と標準偏差を表2に示す。この群分けは第2回調査時に達成率が変化しても変更しなかった。例えば、第1回調査時に上位群であった子どもは、その後達成率が集団内で相対的に低くなって、そのまま上位群とした。なお、本論文中では3歳児クラスを「3歳児」、4歳児クラスを「4歳児」、5歳児クラスを「5歳児」と表記する。

表1 調査対象園児の内訳

	下位群	中位群	上位群
3歳児	131	131	132
4歳児	173	176	175
5歳児	182	180	184

表2 6領域合計の達成率

		2004年6月		2005年3月	
3歳児	下位群	45.2	( 5.9 )	62.5	( 10.4 )
	中位群	60.1	( 3.7 )	71.5	( 9.5 )
	上位群	74.6	( 6.9 )	80.5	( 8.5 )
4歳児	下位群	58.2	( 8.4 )	70.3	( 10.5 )
	中位群	71.1	( 2.1 )	78.6	( 10.1 )
	上位群	80.5	( 4.7 )	82.0	( 12.2 )
5歳児	下位群	68.1	( 9.6 )	83.2	( 12.9 )
	中位群	81.8	( 2.7 )	89.6	( 6.7 )
	上位群	91.2	( 3.6 )	92.5	( 6.6 )

注) 括弧内は標準偏差

**調査時期** 調査時期は、2004年6月と2005年3月であった。以後、2004年6月時点の調査を「第1回調査」、2005年3月時点の調査を「第2回調査」と呼ぶ。

## 結果と考察

各調査時期における調査対象の達成率を図1～6に示す。各領域の達成率を角変換した値について時期(2:被験者内要因)×領域(6:被験者内要因)×学年(3:被験者間要因)×達成率群(3:被験者間要因)の4要因反復測定分散分析を行った結果を表3に示す。

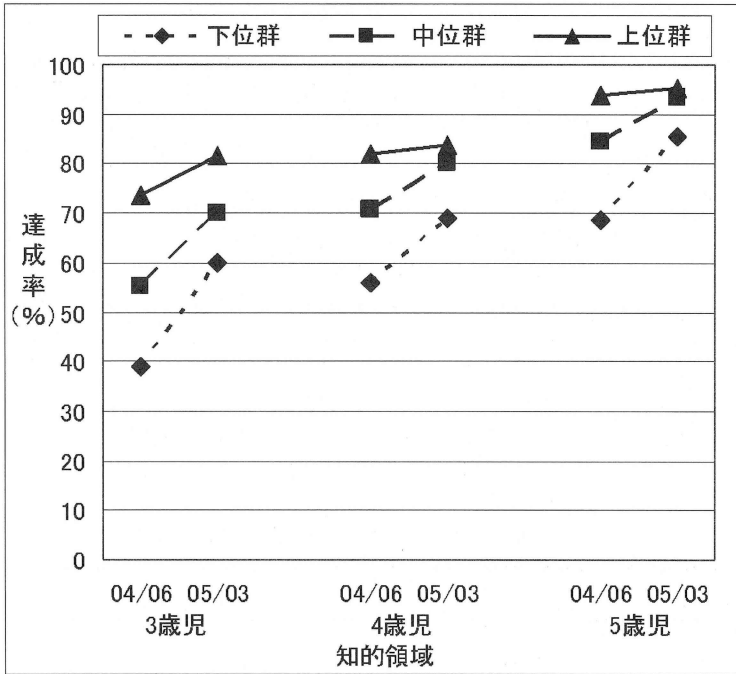


図1 知的領域の発達評価達成率

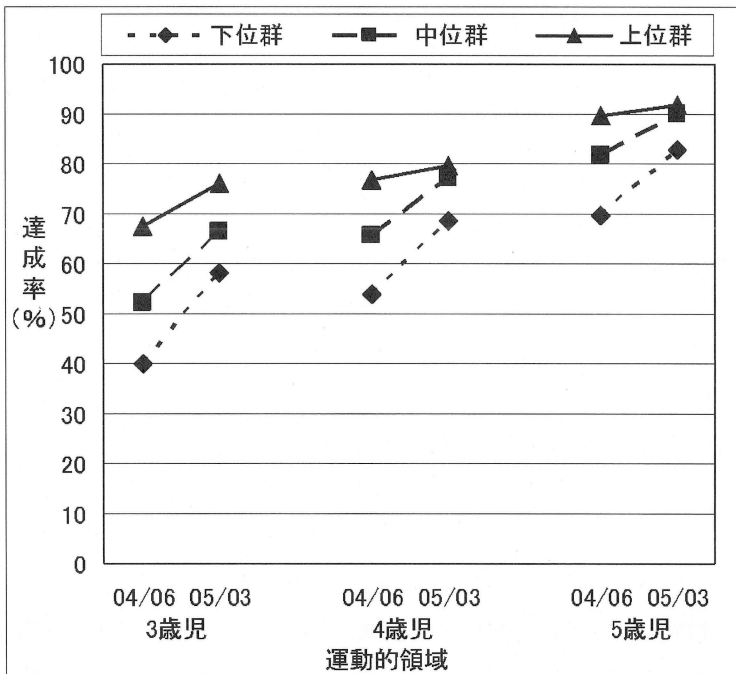


図2 運動的領域の発達評価達成率

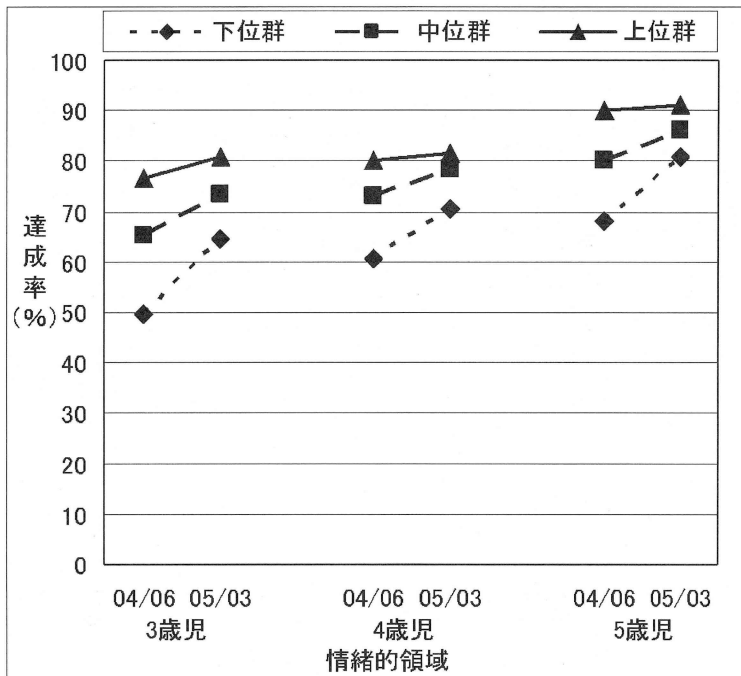


図3 情緒的領域の発達評価達成率

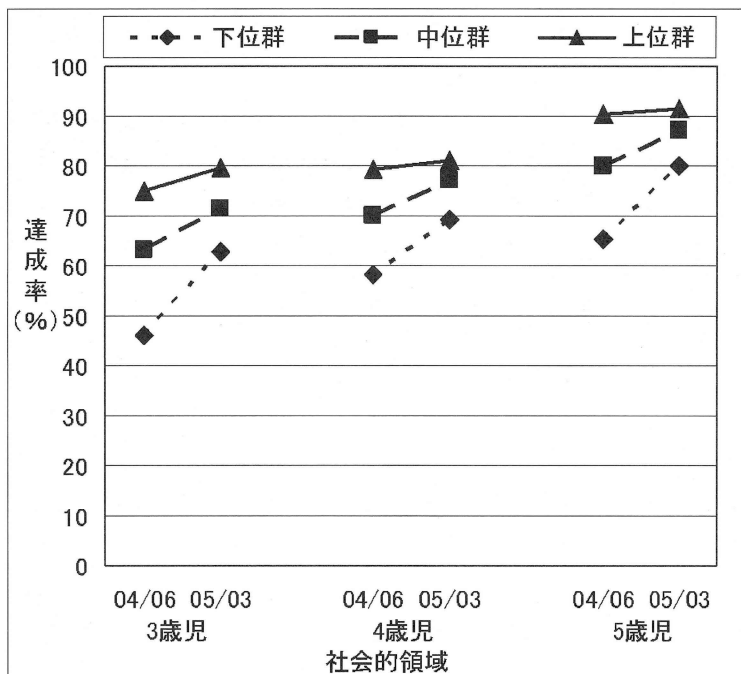


図4 社会的領域の発達評価達成率

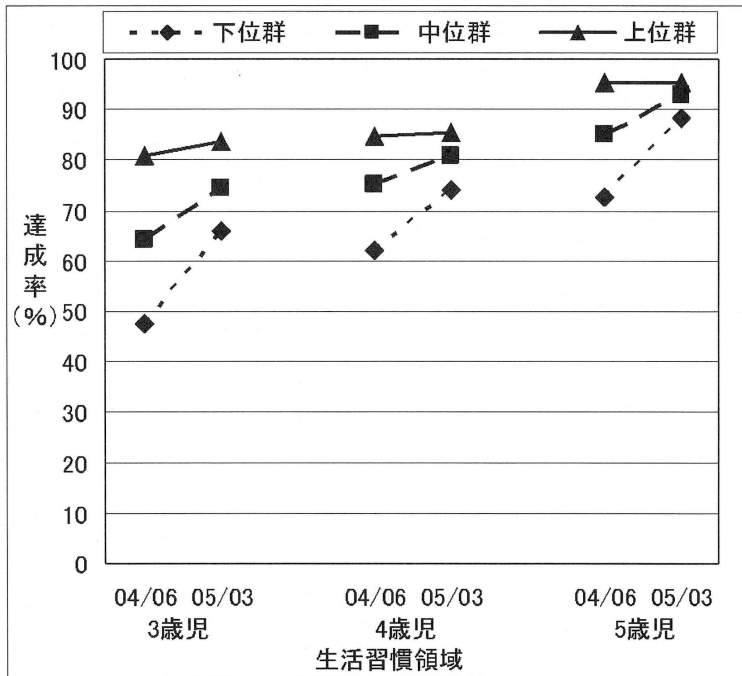


図5 生活習慣領域の発達評価達成率

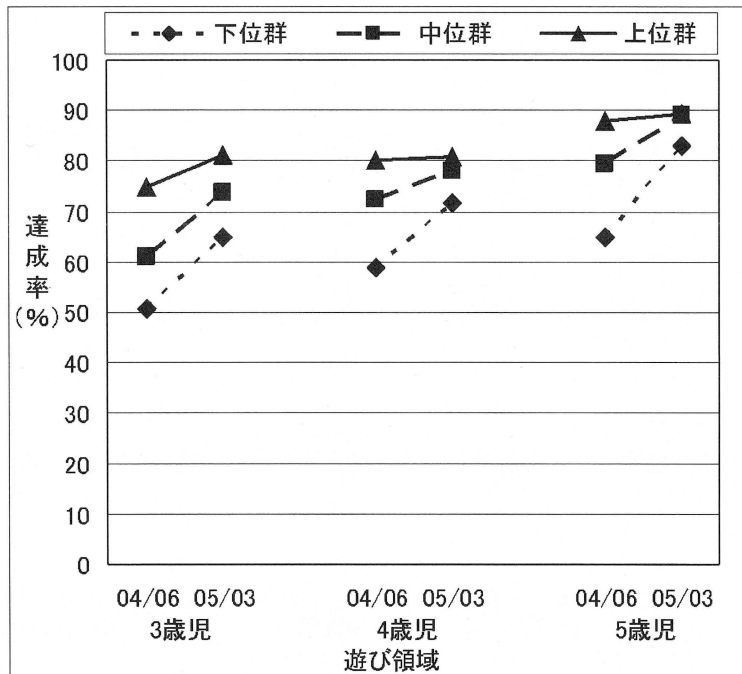


図6 遊び領域の発達評価達成率

表 3 分散分析表

	自由度	F 値	
<b>被験者内効果</b>			
時期×領域	5	37.75	**
時期×領域×学年	10	5.13	**
時期×領域×達成率群	10	6.27	**
時期×領域×学年×達成率群	20	3.25	**
誤差(時期×領域)	7275		
<b>領域</b>			
領域	5	249.02	**
領域×学年	10	77.99	**
領域×達成率群	10	18.45	**
領域×学年×達成率群	20	3.41	**
誤差(領域)	7275		
<b>時期</b>			
時期	1	950.63	**
時期×学年	2	17.17	**
時期×達成率群	2	87.53	**
時期×学年×達成率群	4	3.42	**
誤差(時期)	1455		
<b>被験者間効果</b>			
学年	2	930.97	**
達成率群	2	817.97	**
学年×達成率群	4	6.05	**
誤差	1455		
注)	**・・・・p<.01		

本論文では、縦断的傾向に関わる部分を中心に報告する。

1 時期による違い 最初に全体的な縦断的变化について報告する。4 要因反復測定分散分析の結果、時期の主効果が有意であり、全体的には第 1 回よりも第 2 回の方が達成率は高く、約 9 ヶ月の間に発達評価の達成率が上昇したことが明らかになった。

また、時期×年齢の交互作用が有意であり、第 1 回調査から第 2 回調査にかけて、年少児ほど達成率がより上昇することが示された。

さらに時期×達成率群の交互作用が有意であり、下位群は上位群や中位群と比べて、第 2 回調査において達成率がより上昇することが示された。

以上のように、全体的な縦断的变化については、同一年度内の約 9 ヶ月の間に子どもたちは順調に発達していくことが明らかとなった。特に、年少児や、年度の初めの頃に出足がゆっくりであった子どもほど、同一年度内での発達の伸びが顕著であった。子どもたちの発達は、全ての子どもが 3 年間を通して均一なペースで進むのではなく、子どものその時の状態によって、発達のペースが異なるものであると言える。

2 領域による違い 次に発達評価に含まれた 6 つの領域による違いについて報告する。6 つの領域による達成率の違いを図 7 に示す。4 要因反復測定分散分析の結果、領域の主効果が有

意であり、全体としては生活習慣>知的領域>情緒的領域=遊び>社会的領域>運動的領域であった。

また、時期×領域の交互作用が有意であり、6つの領域の中でも特に知的領域と運動的領域で第1回調査と第2回調査の達成率の違いが大きく、第1回調査から第2回調査の間に達成率が著しく上昇したことが示された。

6つの領域の質問項目は、5歳の時点で達成率が80%を超えることが先行研究から示されているものであった。このことを考え合わせると、本研究の結果は、6つの領域の発達は最終的には5歳の時点では達成されるものの、領域によって発達のプロセスや速度、発達が特に進む時期などが異なることを示していると言えるだろう。

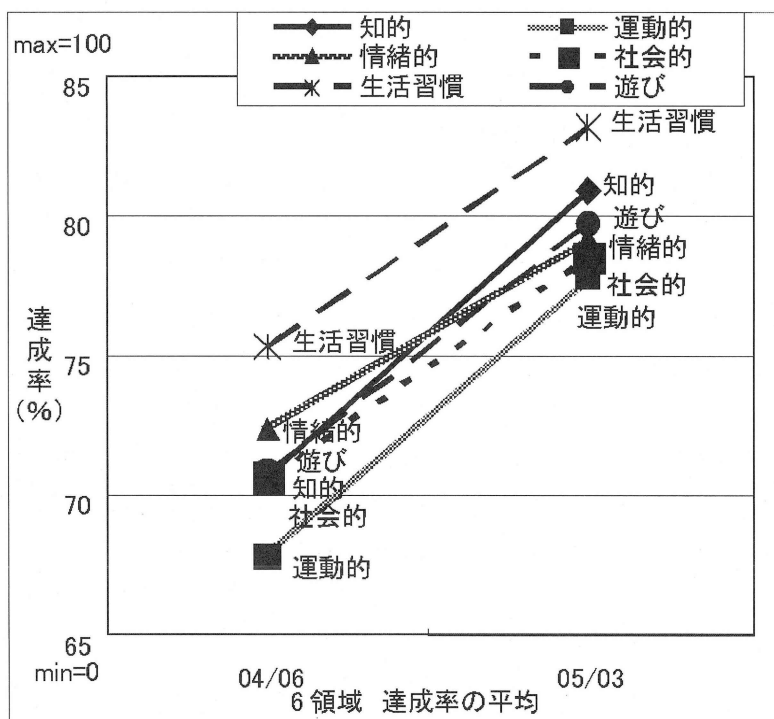


図7 6つの領域による達成率の違い

3 達成率群による違い 6月に実施した第1回調査における発達の程度に応じて、その後の9ヶ月に渡る発達の様相に違いがあるかどうかについて報告する。4要因反復測定分散分析の結果、分散分析の結果、達成率群の主効果が有意で、全体としては上位群の達成率が最も高く、次いで中位群の達成率が高く、下位群の達成率が最も低いことが示された。

一方で、先述の通り、時期×達成率群の交互作用が有意であり、上位群・中位群・下位群の間の達成率の違いは、第1回調査時の方が第2回調査時より大きく、第2回調査時には達成率



群の間の達成率の違いは小さくなることが示された。

この結果は、年度の初めの頃の発達の程度の違いは、年度の終わり頃になるまで持続するものの、年度の初めの頃に出足がゆっくりであった子どもほど約9ヶ月の間に顕著に達成率が上昇し、年度の終わり頃には発達の程度の違いは小さくなることを示している。このことは、あくまでも平均的な話ではあるが、年度の初めの頃の発達の程度の違いに関わらず、全ての子どもが幼稚園教育を通じて一定の発達まで到達することを保証されているということを示唆しているのではないかと考えられる。

4 時期・領域・学年・達成率群の交互作用 最後に、調査時期、発達領域、年齢、年度の初めの発達の程度の違いの全てを考慮した場合の結果について報告する。4要因反復測定分散分析の結果、時期×領域×学年×達成率群の交互作用が有意であった。

まず、知的領域、社会的領域、生活習慣、遊びの4領域においては、年齢や達成率群によって時期による達成率の伸びに違いがあることが示された。具体的には、社会的領域、生活習慣、遊びでは、第1回調査では上位群、中位群、下位群の全てで、5歳児と4歳児と3歳児の間ではいずれも達成率に差があったが、第2回調査では上位群において3歳児と4歳児の間の差が消滅した。すなわち、これらの3つの領域では、年度の初めの全体的な発達の程度が高い3歳児の場合には、達成率は約9ヶ月の間に著しく上昇し、年度の終わり頃には上位群4歳児とさほど変わらない程度にまで達することが示された。この結果から、領域や、子どもの発達の程度に応じて、発達が著しく進む時期が異なることが示唆される。社会的領域、生活習慣、遊びであれば、年度の初めに発達の出足が速い子どもの場合、その発達の最も著しい時期は3歳児クラスの1年間であると言える。

また遊び領域において、5歳児の場合、第1回調査の時には上位群と中位群と下位群の間ではいずれも達成率に差があったが、第2回調査では、上位群と中位群の差は消滅した。すなわち、遊び領域では、年度の初めの全体的な発達が中程度の5歳児の場合には、達成率は約9ヶ月の間に著しく上昇し、年度の終わり頃には年度の初めにあった上位群との差がなくなる程度にまで達することが示された。

一方、運動的領域と情緒的領域においては、第1回調査の方が第2回調査よりも上位群・中位群・下位群の間の差がいずれも大きく、第1回調査の達成率の低い子どもの方が第2回調査までの間に大きく達成率が上昇することが示された。

## 総合的考察

本研究は、一人一人の幼児の育ちの過程を縦断的に捉えるために、同一調査対象者に対して同一年度内に発達評価調査を2度実施した。その結果、発達の達成率は全体的には第1回よりも第2回の方が高く、この傾向は特に年少児と第1回の達成率が低い子どもに顕著であること

が示された。領域間の比較においては、生活習慣が最も達成率が高く、次いで知的領域、情緒的領域と遊び、社会的領域、運動的領域と続き、知的領域と運動的領域で時期による達成率の伸びが特に大きかった。また、発達程度のばらつきは年度の初めの方が大きく、年度末には差が縮まることが示された。さらに学年や達成率群によって時期による達成率の伸びに違いがあることが示された。

今後、多様な保育実践の園を対象にし、保育の実践のしかたとの発達の過程との関連や、評価者であった保育者が、時期によって評価する側面や基準が変化している可能性についても検討が必要である。また、今回は同一年度内の変化を縦断的に検討したが、2年、3年というようならに長期的な発達の變化や、小学校への進学後との連続性についても検討が必要であると考えらる。

## 文 献

- 仙田満 (2005) 「子どもの居場所—その重要性と安全性 (特集:子どもの生活環境)」 発達, 104 (26), 54-58.
- 関口はつ江 (2003) 「幼稚園における保育方法と保育者による発達評価の関連に関する予備的研究」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 1, pp27-40.
- 関口はつ江・長田瑞恵・野口隆子 (2005) 「幼稚園における保育方法と保育者による発達評価の関連 (1)」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 3, pp1-13.

資料1：発達評価 項目一覧

領域	項目番号	質問
知的	A1	かなで自分の姓名を書く
	A2	“右”と“左”の区別ができる、または、自分の左と右がわかる
	A3	“きのう”と“あした”の区別がわかる
	A4	“たて”と“よこ”の区別ができる
	A5	かなで書かれた自分の姓名を読む
	A6	両方の指が何本あるか、見ないで正しく言う
	A7	両方の指の数を正しく数える
	A8	黄色や緑など主な色の名前と実際の色がほぼ一致する
	A9	100円玉がわかる
	A10	自分の誕生日がわかる
	A11	四角形のお手本をまねしてかく
	A12	人数を数えて物を配ることができる
	A13	サイコロの出た目の数がわかる
	A14	カレンダーで何日というとその数字を指す
	A15	絵本やお話のあらすじを人に話す
	A16	今日は、何曜日か分かる
	A17	粘土で“～らしく”動物、乗り物、野菜など、かたちのあるものを作ろうとする
	A18	頭、胴体、四肢のそろった人物画を描く
	A19	時計がわかる(12時、3時など)
	A20	相手の(友達)の言葉を理解しながら会話が成立する
	A21	クラス全員への先生の話をも自分のこととして受け止め、理解する
	A22	動植物など自分の関心のあるものを本(図鑑)などでみる
	A23	自然現象(例えば雨が降るわけなど)の理由を尋ねたりする
	A24	ひらがなを読む
	A25	ひらがなを書く
運動的	B1	しきいの上(あるいは平均台)をまっすぐに両脚をかわりばんに踏み出して歩く
	B2	片足とび(ケンケン)をする、20センチぐらい
	B3	片足立ちをする
	B4	プランコをこいでのる
	B5	でんぐり返しをする
	B6	スキップをする
	B7	相手が投げたボールを両手で受け止める
	B8	登り棒に登る
	B9	ボールをつづけて10回くらいつく
	B10	ひとりなわとびをする(数回つづける)
	B11	子ども同士でリレーをして遊ぶ
	B12	鉄棒で前まわりをする
	B13	うんていでぶら下がって渡る
	B14	箸で食べる
	B15	はさみを使って簡単な形(紙)を切る
	B16	服の前のボタンをひとりでかける
	B17	ひもをかた結びに結ぶ(たて結びでもよい)
	B18	片目だけつむる
	B19	200mぐらい続けて走る
	B20	60cmの高さからとび下りる

領域	項目番号	質 問
情 緒 的	C1	友達の喜ぶことを自分から喜んでする
	C2	話を聞きながら想像して楽しむ
	C3	自分でよくしたいのに、できないとくやしがる
	C4	積み木を積んで、もう少しでできあがるところでくずれるとくやしがる
	C5	かなしい話を聞いて、かなしがる
	C6	遠足をたのしみに準備していて、中止になるとかなしがる
	C7	友達みんなのなかからはずれると、かなしがる
	C8	草や木などの自然物に親しむ
	C9	動物をかわいがる
	C10	小さい子をかわいがる
	C11	絵本や登場人物の、そのときどきの気持ちが言える
	C12	きれいなものを見て“きれい”という
	C13	風の音、雨の音などを感じ、言葉で表現をする
	C14	飼育していた小動物が死ぬとかわいそうがる
	C15	困っている子どもに共感して何かをしてあげようとする
	C16	自分から気がついて全体の役にたつ
	C17	友達の病気やけががよくなると喜ぶ
	C18	相手の気持ちを理解しようと、聞いたり考えたりする
	C19	必要なときは保育者の助けを(援助)を求める
	C20	自分の要求が通らなくても自分なりに気持ちをおさめる
	C21	自分の目標までやりとげようと、がんばる
	C22	ころんですりむいた膝(または手など)が痛くても泣かなくなる
	C23	おとな(先生や親)が喜ぶことをしようとする
	C24	相手や周りの人の気持ちを考えて自分の行動を変える
	C25	自分の大切なものが損なわれると悲しがる
社 会 的	D1	友達と遊んでいるとき、ほかの子の承諾や同意をもとめる
	D2	助けが必要なとき、ほかの子に助けを求める
	D3	ほかの子どもを援助したり、守ったりする
	D4	ほかの子どもたちに玩具をもってくる
	D5	ほかの子どもにめいわくをかけたなら、おわびを言う。
	D6	競争心がある(他の子どもとの間で)
	D7	数人がいっしょになって、子どもの発案した遊びをいっしょにする
	D8	自分のしたことを保育者に話して聞かせる
	D9	自分のしたことに責任を負う(自分のあやまちを謝るなど)
	D10	まかされたことを責任をもってする
	D11	保護者がいてもいなくても、きまったことはちゃんとする
	D12	“わたし”とか“ぼく”とかいう言葉で自分を呼ぶ
	D13	自分より小さい子ができるまで待ってあげる
	D14	友達が何かしているとき、じゃまをしない
	D15	お店屋さんごっこで、おつりのやりとりをする
	D16	信号を見て、正しく渡る
	D17	じゃんけんで勝ち負けがわかる
	D18	共同の物を順番に使うことができる
	D19	けんかなどのとき、自分の考えを相手にはっきりいう
	D20	友達同士のトラブルの間に入って収拾しようとする
	D21	保育者が掃除など子どもの生活のための仕事をしているのを見て、手伝おうとする
	D22	いやなときは相手にはっきり「いや」という
	D23	悪いことや困ることをしている子に「いけない」と止める
	D24	クラスみんなで何かするときなど、みんなに合わせて行動する(遅れないなど)
	D25	助けられたり、して貰ったとき「ありがとう」と感謝する

領域	項目 番号	質 問
生活習慣	E1	ソックス(短い靴下)をひとりではく
	E2	ひとりで鼻をかむ、または、自分で気がついて鼻をかむ
	E3	大便をひとりでする(全く手がかからない)
	E4	うがいをする
	E5	ひとりで歯ブラシを動かして歯をみがく
	E6	嫌いなものでも、がんばって食べようとする
	E7	汗をかいたら自分で着替える
	E8	水をこぼしたり、こぼれていたなら、自分からぞうきんでふく
	E9	自分から、遊んだあとの自分の遊具をかたずける
	E10	自分から、遊んだあとの皆の遊具をかたずける
	E11	手ぬぐいやぞうきんをしぼる
	E12	自分から“いただきます”や“ごちそうさま”をいう
	E13	いわれなくても食事の前に手を洗う
	E14	脱いだものを一応たんで(きちんとでなくてもよい)決まった場所に置く
	E15	食事の片づけを自分でする
	E16	所持品の始末をきちんとする
	E17	挨拶(おはよう、さようならなど)を自分からする
遊び	F1	自分から遊びを見つけて遊び込む
	F2	遊びのなかで、新しいことを考えだしたり、新しいやりかたを工夫したりする
	F3	周囲の物を積極的に遊びに活用する
	F4	身辺のものや出来事に関心を持って、遊びを取り入れたり、発展させる
	F5	いっしょに遊ぼうと積極的に仲間に誘う
	F6	遊びに欲しいものがあるとき、順番に待ったり貸してといて、何とかして達成しようとする
	F7	遊びがうまくいかないとき、自分達で協力して解決しようとする
	F8	遊びに集中し、周りが騒いでも妨げられない
	F9	積み木やブロックで、遊びの場所をつくる
	F10	ごっこ遊びのとき、そのものになりきって遊ぶ
	F11	友達とおもしろいアイデアを出しあって遊ぶ
	F12	積極的に泥遊びや砂遊びを楽しむ(どちらか片方でよい)
	F13	遊びの中で新しい役割を考え出したり、自由に役割を交換したりして遊ぶ
	F14	友達の遊びに進んで加わったり、友達の提案に乗って協調して遊ぶ
	F15	同じ遊びを数日間継続して発展させながら遊ぶ
	F16	遊びのルール(陣地ではつかまらないなど)を理解して遊ぶ